

## 5. 遺物研究

### 再興九谷窯の暦手碗

—金沢大学宝町遺跡と金沢大学鶴間遺跡出土品—

佐々木 花江

金沢大学埋蔵文化財調査センター

#### はじめに

金沢大学宝町遺跡とは、医学部と医学部附属病院の敷地内である。江戸時代は与力を集めて居住区とした地域の一部にあたり、近年まで与力町という町名が残っていた。金沢大学鶴間遺跡は医学部保健学科のあるキャンパスの遺跡で、宝町遺跡より道路を隔てた東側にある。江戸時代には武家の下屋敷や弓場があり、浅野川を見下ろす高い崖の上に位置する。この辺りは御城と兼六園から直線の小立野通りで結ばれた天徳院の隣地にあたる。加賀藩三代藩主前田利常の正室として徳川家から嫁いだ珠姫を祀った天徳院は、江戸時代のどの絵図にも城下町の南東端に描かれている。この与力町は天徳院に接する如来寺と経王寺に続く位置にある。

宝町遺跡と鶴間遺跡からは、当時の生活の様子を物語る遺物が大量に出土している。なかでも居住区であったことから、日常生活道具であり腐敗などの経年変化を受けにくい陶磁器が大量に出土した。肥前や美濃・瀬戸、京都や信楽などからもたらされたものが多い。さらに、加賀藩や大聖寺藩で殖産興業として勧められた再興九谷窯の製品も多く見つかっている。他の地域に比べて多くの再興九谷窯製品が金沢市内で発見されることは、加賀藩での日常生活における藩内生産品の流通の実際を具体的に映すものである。

#### 再興九谷の窯

多数の出土陶磁器のうち、再興九谷窯で生産された陶磁器として、吉田屋窯や若杉窯、八幡窯、春日山窯などの製品が目につく。春日山窯のように銘があるためにその窯の製品であることがわかるものや、吉田屋窯の一部の製品のように文献をも考証して、独特な筆使い故に描いた職人の名前まで推定できるものもある。

他方、器そのものが特殊な使い方をするものや、特殊な意味を持つものも注目される。なかでも暦文を碗の外面に描いた暦手碗と呼ばれる茶碗は、加賀藩内では複数の遺跡から出土して報告されているが、他地域での出土は少ない。多くの生活遺物が発掘された江戸の町からも、報告例は多くない。これに比べ、宝町遺跡や鶴間遺跡という限られた範囲のなかでさえまとまった出土のあった暦手碗は、加賀という土地に意味がある碗であると想像させるものである。暦手碗は年号とその年の暦の子細を器に書いているので、製作された時期を正確に知るのに役立つ。年号の部分が欠けていても、現存する月頭暦と記載された節季などをつきあわせることで、書かれている年を知ることができる。ここでは、金沢大学キャンパスの発掘調査で出土した暦手碗を紹介し、その特徴を見ていきたい。

#### 出土した暦手碗

江戸時代には与力町と経王寺や如来寺があった宝町遺跡、すなわち医学部及び医学部附属病院地区、および武家の下屋敷や弓場があった医学部保健学科の鶴間遺跡より出土した暦手碗片は全部で22点である。基本的に割れて細片となって出土する。多数の碎片が接合しほぼ1個体となった碗も、接合できない小片も同じく「1点」と数えているので、個々の片数を数えると非常に多くの暦手碗が出土したと言える。

暦が正月から使われることを考えれば、暦手碗の焼成時期は碗に書いてある年の前年である。出土した22点の内訳は、年号のわかる染付碗が13点、全く年号の推定のしようがない染付片が5点、そして、色絵碗で年号のわかるのが3点、年号の不明な色絵碗が1点である。

年号のわかる染付片のなかで最も古いものは文政2年で、ほぼ完形のものを含め6点ある。文政5年が1点で、文政2年か5年か確定できないものが1点。文政7年が3点。文政8年と文政13年がそれぞれ1点ずつである。色絵碗は天保期になってから出現するようで、天保6年が2点、5年または6年の可能性のあるものが1点であった。『金沢大学文化財学研究』6号12ページで文化10年のものが1片あると紹介したが、文化10年である破片を確認できず、年代の誤認であったものと思われる。

染付の暦手碗は、まず外面を12ヶ月または閏月を加えた13ヶ月に区切り、外面口縁部に何月と大の月か小の月かを墨弾きの手法で書き、中段の枠には朔日の干支を絵や文字で描く。下段枠は外面のほぼ中程から、その月の十二節に加え彼岸、冬至、庚申、八専、月食、土用などが日付とともに文字で記される。碗の内側口縁部には外面の口縁帯と同じく墨弾き手法で年号と干支、その年の日数が書かれる。小松市八幡遺跡からは、口縁部の月を記入する部分が墨弾き手法ではなく、白地に染付で文字を書いたものが出土している。金沢大学キャンパスで出土した染付口縁はどれも墨弾き手法であって、八幡に窯が移る天保7年以前の若杉窯で焼成された碗である。金沢市高岡町遺跡からも墨弾き手法の文政4年暦手碗が出土しており、若杉時代と八幡時代の技法の違いとみることができるとも知れない。内面見込みには「歳徳神」や「年徳」と恵方、「万よし」と書く。見込みの確認できる文政2年のものには「歳徳神」と書かれているが、年代のわかる文政5年以降の見込みには「年徳」と書かれるようになる。高岡町遺跡で出土した文政4年碗の見込みは「年徳」となっている。

色絵暦手碗は染付で枠線を引いている。中段の干支は赤、黄、緑の顔料を用いて絵や文字で描き、上段の月大小と下段の暦文部分には赤で文字を入れている。八幡遺跡では上絵窯の窯体片が発掘され色絵暦手碗も出土しているが、金沢大学内出土品は八幡に窯が移る天保7年以前の碗で、若杉時代にも色絵の暦手碗が製作されていたことになる。

手書きであるため、絵や字の上手下手により何人かの職人がいたことが想像される。そして同じ手とみえる絵が達者な碗に組み合わせられる字がいつも同じとは限らず、絵と字を分担して書いていた可能性があることが察せられる。同じ年号の碗でも、同じ干支が常に同じく絵または字で描かれるとは限らず、干支を表すのに文字を使うか絵で描くかはかなり自由であった様子が見て取れる。また細かく見ていくと、各月の十二節や彼岸、冬至などを書く欄の日付が、印刷された月頭暦と違っているものがみつきり、職人の書き間違いなのか、手元の手本とした暦の写し違いなのか、または違う日付の暦が存在したのか興味深い。

### 暦手碗の産地

稲垣正宏氏が「謎の暦茶碗」（『日本の暦と歳時記』新人物往来社2002）に国内各地から出土した暦手碗を紹介している。小倉城出土品や東山窯の例をのぞくと、文化・文政年間から天保年間の磁器の暦手碗の出土例は、金沢市内出土の若杉窯製品に限られる。また、藤田邦雄氏が「暦手碗と月頭暦—小松市八幡遺跡出土品から—」（『金沢大学文化財学研究』62004）で、八幡遺跡出土品は天保8年から嘉永5年までの間の8種類であると述べている。金沢大学キャンパス出土品は文政2年(1819)から天保6年(1835)の間で、八幡遺跡の窯跡より前の操業である若杉村の窯(1805-1836)の製品ということになる。金沢市醒ヶ井遺跡出土の文政3年碗の少々腰の脹らみがある形は、金沢大学キャンパス出土の全ての文政2年碗や文政8年の碗とよく似ている。しかしながら、文政5年の碗は高岡町遺跡出土の文政4年碗と同様に腰の脹らみの無い形で、単純に時間とともに形が変化というわけではない。

京都では陶器の暦手碗が作られていた。東京や徳島、山口での出土が報告されている。書

かれた年は明和10年までで、例外として天保2年の東京での遺跡出土品がある。大窯業産地である有田や波佐見、瀬戸や美濃で作られていなかったことに、暦手碗の特殊性がうかぶ。

#### おわりに

暦手碗は書いてある年の前年に作られる。稲垣氏が紹介した例に興味深いものがある。萩市大野毛利家上屋敷出土の色絵暦文茶碗で、明和10年の年号が書かれている。しかし、明和は9年11月16日までで翌日から安永に改元したため、ここに書かれている明和10年は存在しない。つまり前年の11月には翌年の暦を書いた茶碗が既に焼成され、それが流通していたことになる。また、八幡遺跡出土品にも天保と書かれ、暦から天保15年と推定される破片がある。実際には弘化元年で、12月2日の改元前に焼成されていたことがわかる。

現在でも京都に陶器の暦手抹茶碗を作る作家がいる。数年に一度ほどの頻度で正月にむけて暦手茶碗の注文があるという。暦という性質上、正月から使い始めると考えるのが自然であろう。しかし茶会記には暦の茶碗が使われたとの記載がない。出土品は小振りであるため、大振りの煎茶碗と考える方が良いのかも知れない。ただし煎茶道でも暦手茶碗の用途は知られていないという。金沢大学内で出土した暦手碗の、いくつかの破片が焼継ぎをしていることを考えると、大事に使っていたことがうかがえる。縁起物として一年間大事に使ったのであろうか。大きさからは、正月のお福茶碗に良い。江戸時代の加賀での正月行事を想う。



文政2年染付碗 口径10cm 高さ7cm



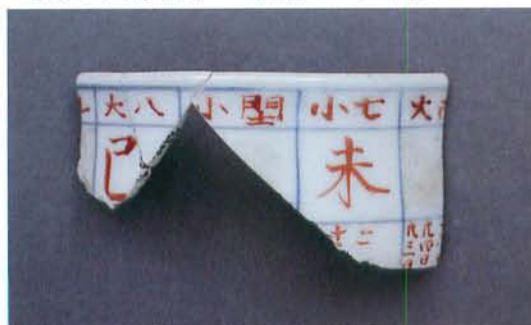
文政2年染付碗 見込



文政5年染付碗 口径9.6cm 高さ6.7cm



文政8年染付碗 口径9.4cm 高さ6.7cm



天保6年色絵碗 外面 口径9.4cm



天保6年色絵碗 内面